

科学の詩

——詩の水面下の沈鐘

森田 孟

画期的な、と言ってもよい選詩集が世に現れてから三十年が経った。「科学ないしその概念・主題・心象を、科学上の主題を表現する以外の目的のために使用している英詩の詩華集^{*}」である。科学は事実と理性に、詩は感情と想像力に基づくもので、詩と科学は、世界を観る二つの全く異なった、おそらく相補的な方法であって、互いに何の関係もないと抗議する読者もいるかも知れないが、と始められる二一頁に及ぶ序文は、科学と詩の、簡潔にして詳細・的確な歴史を綴って見事な出来栄えであった。

現代では、社会科学と心理学のような分野を除外すれば、純粹科学を、実験手法を實踐して定量化できて、他者によって反復されうる結果を生み出せる自然現象の探求、

に限定するのは比較的容易である。だから、本書の詩は、大方の話題が「純粹」科学であるもの限り、応用科学や技術の類ではないものとしたが、編者たちはある程度の実用主義を行使して、科学とは何か、及び、科学の詩と考えられていいものは何かを、決定したと言う。

チョーサー以降主な詩人たちは皆、その時代の科学と何らかの関わりを持ってきたことが分るので、というわけで、十三世紀後期からの、科学とその役割について考えさせてくれようとする詩が集成されている。不明の作者も含まれた一一六人からの長短二〇五篇である。

* *Poems of Science*, edited by John Heath-Stubs and Phillips Salman, Penguin Books, 1984, p. 17. 本稿の各作品末の

() 内数字は、その収録箇所を示すページ。

英詩には、〈クレリヒュー〉 'Clerehew' なる（人物四行詩）がある。二つの二行連句から成る四行の軽妙な詩形で、創作者の英国の作家ベントリー (Edmund Clerihew Bentley, 1875-1956) のシドルネームに因むものだが、第一行に有名人の名前を挙げてその人物に関するものを内容とする。その詩形の典型例として挙げられるのが、創作者自身の次の作品である。

Sir Humphrey Davy (ハンフリー・デイヴィー卿は
Abominated gravv. 肉汁を忌み嫌った

He lived in the odium 彼はソジウムを発見したという
Of having discovered sodium. 非難を蒙りながら生きた。)

このデイヴィー卿 (Sir Humphrey Davy, 1778-1829) は、「デイヴィー灯」 'Davy Lamp' —— かつて坑夫が用いた安全灯、炎を金網で囲い坑内空気中のメタンガス着火を防いだもの——の発明者として特に名高い英国の化学者だが、その彼の作品が収録されているので、まずそれから見てみよう。尚、先の〈クレリヒュー〉に出てくる「ソジウム」は「ナトリウム」の英語名。各種の塩として天然に存在する、銀

白色の柔らかい金属元素で、正常な体液平衡などを保つのに身体に必要な元素である。

科学の研究、『天才の息子たち』から

Scientific Study from *The Sons of Genius*

ハンフリー・デイヴィー卿

自然の息子たち——彼らも同じように大いに喜ぶ

荒々しい断崖の碎けた急斜面を、
嵐の夜の荒涼たる恐ろしい事共を

そして身の毛もよだつ深みの雷鳴音を。

赤い雷光がエーテルの中を飛んで

白く泡立つ大波が岸辺を激しく鞭打つ時、

空のごろごろ鳴る雷鳴に向かつて

水の怒り狂った悪魔が咆哮する時、

そして、〈自然〉の活き活きと燃える火に触れられずに

本来の恍惚状態が眠たげな魂を満たしたりしない時、

そういう時 昔の時代は美しい旋律を奏でる堅琴で

数々の情熱の憤激に鎮まれと命じることが出来るのだ。

青く細いロウソクの憂鬱な光によって、

辺り一帯に夜中の奔流が溢れ出て

恐ろしい塞ぎ込みが夜の顔に付きまとう間

彼ら昔の時代は言葉にならない孤独な時間を身に纏う。

ああ！ その時何と甘美なことか 夜を過ごすことは

言葉に出さずにギリシャのページと語らうのだから、

その間 ホメーロスが常に生き続ける自作詩を奏でるか

理性がそのアテネの賢者に耳を傾けるかする。

〈自然〉の法則を精査するのだ、温和な〈哲学〉の

平穏な支配力を探求するのだ、

あるいはニュートンの翼に乗って崇高に飛翔するのだ

星空の光輝く地帯を縫いながら。

ああ！誰が 恍惚状態が魂を満たすものを描けようか？

アテネの自由が戦争へと起き上がり

その戦闘の豪音の雷鳴に轟き渡れと命じて

己が岸边からその暴君をおののかせ追い払う時。

こういう追求から天才の息子たちは精査する

自らの創造の目的を——そこから彼らは知るので

人間の公正な 崇高な 不滅の希望を

そういう時からのみ 不死の喜びの数々が流れ出る。

穏和にされた科学によって、平和な魂の上に

永遠の〈叡智〉のぎらつく光で明るく輝いて

柔和な眼差しの平和が、己の温和な支配力を揮って

取るに足りない〈諸々の情熱〉を遠くへと追い払うのだ。

(二七八—二七九)

全て十音節詩行の四行詩九連が、A B A Bの型で押韻する整然たる構成によって、科学は世界に平和を、人類に幸福をもたらすために存在意義があることを高らかに詠った詩。科学が暴君になりうることを熟知している科学者の熱い思いが伝わって来よう。尚、第三連三行目の「堅琴」*tyres* は、「抒情詩」を意味するだろう。

次も同じデイヴィー卿の作品。

シジュルラ⁽¹⁾の寺院 The Sybil's Temple

汝の信仰は、おおローマ人よ！ 自然な信仰で

よく適っていた ある時代に、何しろ言語に絶する

光が 目立つ物体をぼんやり覆う雲の中を

きらきら輝いていたのだから——未だ露^{あつら}ではなかったが

シリアの山上の真昼の明るさの中では。

汝のために、天国の〈永遠の主権者〉は

万物の中で生きて動いておられた、——そしてその権力と

属性に 詩の空想は与えたのだ

人間の美と力と優雅を備えた形を。

かのナイアデスは銀色の流れの中でぶつぶつ呟いていた、

かのドリユアースは⁽³⁾鎖き合っている森の中でひそひそ囁き

(彼女の声はゼピュロス⁽⁴⁾の息の音楽)、

青い波に乗って戯れ好きなネーレイデスが動いていた、⁽⁵⁾

かと思うと手にする法螺貝を吹いていた 反響し合う岩々

の間で。

私は不思議とは思わなかった、あのような信仰に動かされ

汝がこの谷間に、シジュルラの寺院を建てても、

そのような情景は十分に相応しかったのだから

心を敬神の念へと激しく昂揚させるのに、——また 創り出すのに

我らの感覚や理性が及ばないようにみえる

あの不確かな思想を、そして預言力のある

神聖な夢を。——自然の形と音に

崇高に共鳴しながら 精神は忘れ去るのだ

自らの現状を、——現世のものとは思えない心象が

発生する——恐ろしい岩々と

生きている流れで張り裂けんばかりの洞窟の真直中で、——

威勢よく断崖から落下しながら、——

日光を浴びてびかびか輝きながら、露で育てられながら

何千という芳香を放つ植物と 芳しい花々が

春の森の甘美な音楽の中を

翼を持つ吟遊詩人たちから、そして山の嵐と

雷鳴とばかりに轟く大瀑布のひときわ大きな音から、

靈感の声がやって来ても 尤もなのだ！

(一七九—一八〇)

訳注

(一) Sybil ローマ建国の祖とされるアイネイアースが託宣を求めたイタリアはクマエの謎の巫女

- (2) Naiad 川や泉に住む美しい少女の姿をした水の精
- (3) Dryad 樹木の精であるニンフ
- (4) Zephyr 西風の神
- (5) Nereid 「海の老人」と呼ばれた海神ネーレウス
(Nereus) の五十人の娘の一人、海の精

十音節詩行のブランク・ヴァース（押韻しない）三二行の美しい詩。やがては科学の探求心の対象となる〈自然〉界の牧歌的雰囲気をまず讃えたというところだろうか。

もう一篇、この化学者の作品である。

「大地のがっしりした柱々は…」

‘The Massy Pillars of the Earth…’

大地のがっしりした柱々は、
不活性の岩々は、緊密な石また石は、
何ら力を与えず、動きを生まず、

〈自然〉にとつては生命のない骨々で、

ゆっくりり変化する、しかしその粉塵は残存する、

そして原子は全て、寸法を取られ、重さを量られて、
平原一帯を吹き捲る突風によって旋回させられるか
肥沃な畑に収められる。

その落下物は 束の間の驟雨から

明るく澄み切った真昼に降ってくるか

花の中に美を燃え立たせるか

大気の中に新鮮さを目醒めさせる。

何物も失われたりはしない。そのエーテルの火は

最も遠方の星から降りてくる、

測り知れない空間の中をずっと

その進路は幾つもの世界によって引きつけられて撓み

大地に達するのだ、その永遠の諸法則は

一つの華麗で賢明な意匠を保ち持つ、

秩序は混沌の中を流れてゆく、

それで体系の全ては神聖なのだ。

もし物質が破壊されることのないものなら

生きている精神が死ぬことは決して起らない、
もし卑金属と混ぜられても創造性さえあるなら
何と確かなことだろう その不滅さは。

だから考えよう 汝が地上で愛してやまない
知性に富む光は いつまでも燃え続けるのだと、
その光沢は更に清らかになり 一層明るくなり
もはや人間の意志で曇らされることはないのだと。

地上で最も栄光に満ちている物は全て
束の間で短命だとみえても
やはり不滅の天国生れの源を
持っているのだ—いつしか消え去る夢ではなく。

美しく変化に富む夕べの光は、
朝空の薄れてゆく輝きは、
天上の次第に消えてゆく色合いは、
永遠の太陽から 発生するのだ。

(一八〇—八一)

全て八音節詩行の四行詩九連で、A B A B の型で押韻する（第四連のみが、fire, descends, space, bends. と、A B C B の韻で例外）。自然界の諸力を、冷静にしかも情熱を込めて讚美する作品で、随所に科学者の眼が光っていることが看取されよう。ガリレオの迫害のように真理の光が神の名による「人間の意志で曇らされ」たりしてはならないのだ。

*

次は米国の随筆家・医師のホウムズ (Oliver Wendell Holmes, 1809-94) の一篇。彼はハーバード大学の解剖学・生理学教授 (1847-82) を勤め、産褥熱の研究などで知られるが、『緋文字』*The Scarlet Letter* (1850) の作者ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) の葬儀の際には、教育者・哲学者・社会改良家のオールコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888) 、「ロンロードの哲人」エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) 、「詩人ロンダフェロウ (Henry Wadsworth Longfellow, 1807-82) と共に、故人に最も親しかった人々が担当する棺側葬送者 (pallbearer) を務めた。

科学の安定性 『或る医学詩からの抜粋』から
The Stability of Science

From Extracts from a Medical Poem

衰弱した海鳥たちは 嵐の中で盲目となり

どこかの高い灯台に各々小さな^{からだ}軀を叩きつける、

するとその粗造りの花崗岩は 彼らの骨折りの報いとして

撒き散らすのだ

彼らの脳髓を意味する筈だったあの小さな埋蔵物を。

それでもその誇らしい組織は朝の太陽を浴びながら

危害が加えられるのに全く無意識のままにいる、

今尚 その赤い標識塔は夕べの光線を浴びせかけている

迷った水先案内人のために 強烈な炎と言えるもので、

否、照り輝いているのだ、一面に燦然たる光輝となつて、

足元に脳無しとなつて散らばっている無数のカモメとカツ

オドロの上に。

私は彼らの宿命を語るのだ、唯、礼節上しないでおくが

我らの同類を余り思いやりのない名前で呼ぶことは、

それでも君が自らの無分別から思い上つて敢えてそうしよ

うとするなら

彼らの悲運を思いみよ、汝愚か者よ、そして注意せよ！

見たまえあそこ その白髪の額の遙か上に聳え立ってい

るのを

高々と雲突くばかりの誇りが千年の二倍にも及んで！

遠方遙か 厩大に覆い被さつた堆積の下に

眠っているのは 芸術のエーゲ海の小島からの灰色の岩、

その充実した行程は、始まるや忽ち旋回しながら

波の中から盛り上がつて大空と混じり合う、

そこでは石切り場の悉くが その大理石を採掘する、

そして積み重なつてゆく時代が各々共通の労役を混ぜ合せ、

ギリシヤ人が、ローマ人が、その大古の壁々を建てた、

物言わぬアラブ人が その神秘に満ちた大広間をアーチ型

天井で覆つた、

その美しい壁龕は無数の大波に洗われているが、そこに

あのシデナム⁽¹⁾が彫り込んだ深い線の跡を辿ろう、

変化してゆくうねりを乗り切つて進む彼方の幅広い前面に

注目しよう、そこにはハンター⁽²⁾のどつしりした櫓が倒れて

いた、

あの角張つた控え壁のそばにルイ⁽³⁾が立っているのを見よ、

石ではあるが彼の揚げた両手からの温もりを、

だから言おう、おお（科学）よ、汝の生命の血は凍るだろ
うか？
ばたばた羽搏く愚行がこのような壁の上ではためく時に。

(二〇一)

訳注

- (1) Sydenham, Thomas (1624-89). リュウマチ性疾患などに
続発する神経障害⁽¹⁾である「シデナム舞踏病」⁽²⁾ 'Sydenham
chorea' を記載した英国の医師
- (2) Hunter, John (1728-93). スコットランドの外科医・生理
学者・解剖学者、か、その兄の解剖学者・産科医の
William (1718-83)
- (3) Louis, Pasteur (1822-96). フランスの化学者・細菌学者
狂犬病の予防ワクチンを完成 (1885)。「パスツール効果」
「パスツレラ菌」「パスツール法」(低温殺菌法) など彼に
因む用語も多い。

二行ずつ押韻する (A A B B C C ……) 二行連句の全て十
音節詩行三二行の作品。灯台に衝突して飛散した海鳥の姿
への医学者らしい観察から、その悲運へ思いを到し、大学
の建物内に飾ってある医学の先達たちの記念物から（科学

の安定性）を希い讚えようとする。

*

次は、スコットランドの物理学者で電磁気学の大成者
マックスウェル (James Clerk Maxwell, 1831-79) の作品
である。

分子進化⁽¹⁾ Molecular Evolution

ベルファスト⁽²⁾、一八七四年 Belfast, 1874

全く不確かな時と場所で、

原子たちは自らの天上の通路を離れ、

偶然に抱擁することで、

その存在全てを産み出した。

そして彼らは一緒にくっつき合って

ここで「親密な関係」を形成しているようにみえるが、
それでも遅かれ早かれ、彼らは自らの束縛をぱっと
引き裂いて 空間の深みを突っ走る。

それで座っていた我らは、科学に押し潰されて

英国のロバのように、賢く莊重に、

今や粗野な（赤獅子⁽³⁾）に変質させられるのだ、

獲った餌食の囲りで我らが暴れ回りわめきちらすように。

こうして、速やかな変態^{メタモルフォーシス}によって

智慧^{ワイズダム}は機智^{ムウツト}になり、科学はお笑い種となる、

無意味なものは芳香^{インセンス}なのだ。我らの鼻腔には、

なぜなら（赤獅子）が話す^{ガスピーク}時には、煙を出す^{スモーク}のだから。

万歳、（無意味なもの）！（赤獅子）の授乳無し育児婦よ、

汝から賢者たちは身に付ける智慧を学び取るのだ、

汝から彼らは選び取るのだ。科学のあの真理の数々を、

それらを汝の中に再び彼らは投げ込むのだ。

観念の何という素晴らしい組み合わせを

無意味なものだけが賢明にも形作れることか！

どのような賢者が、彼女⁽⁴⁾が持つ^スる力の半分^{ハーフ}を持つ^スて

〈真理〉の塔⁽¹⁾という塔を嵐のように襲^ハえるだろうか？

(二三二)

(3) Red Lions 英国学術協会の会員によって、彼らが集つ

て寛ぐために作られたクラブ「原著 三三二」

(4) she 一行前の「無意味なもの」"Nonsense".

奇数行は九音節、偶数行は八音節、但し、二行目と最終行の二四行目は九音節、ということは、最初の二行と最後の二行は九音節の詩行だが、この三連が各々 A B A B C D C D の型で押韻する整然たる詩形で、「分子進化」について述べながら科学の本質を、（無意味なもの）に注目する重要さを、詠い上げた詩と言ってよいだろう。頭韻、脚韻を類用した原詩の弾むような流麗ぶりを拙訳で伝えられないのが残念である。

*

続いて、英国の熱帯病学者で、一九〇二年のノーベル生理・医学賞の受賞者ロナルド・ロス (Ronald Ross, 1857-1932) の詩二篇である。

訳注

(1) アミノ酸や核酸分子の変異で見る生物の進化

(2) 北アイルランド東海岸の港町、首都

記念日 The Anniversary

(一九一七年八月二〇日) (20th August, 1917)

もう二十年前になる

この日我らは見つけたのだ　あの物を、⁽¹⁾

科学により技術によつて

我らは見つけた、それから来たのだ　あの痛激が――

我らが果てしない労苦によつて勝ち得たものを

あのやりきれない世間は軽蔑した――

一言するにも値しないが　今日では――

思い出すにも当たらないこと。

おお〈豪華な庭々〉、美の

〈国々〉　そこでは〈太陽〉が

君主らしい壮麗な衣装の裾を引くが

終日　光で燃られたものだった、

我らは見つけたのだ死を　君の紫色の葉の

下に潜んでいたのを、

我らは見つけたのだ　君の秘密の敵を、

百万人殺害の奴を、

それで我らは手を打つて考えたのだ

君の豊かな幅広さなら鳴り響くだろうと

あの偉大な勝利で――もつと更に

闘っている軍勢がもたらせるよりも高々と。

ああ、それなのに――人々は笑つた。何年もが過ぎ去つた、

世間とは冷たいのだ――

およそ百万人が生命^{いのち}を得るのに　毎年、

思い出すにも当たらないこと！

下方から上昇していったのに

人々は依然として小さすぎるままだ

腹^{はら}智慧^{ワイズダム}を大きく働かせて

彼らは摺み合い　噛み付き　わめき立てる、

こういう幼生期の天使たちは！――しかし真物の

偉業^{しゅゐつた}が出来ると――

取るに足りない博士のやること――

全く何の価値もない！　となる。

(二四六)

訳注

(1) the thing　ロスが解剖していたハマダラカの中の、マリアに羅つた寄生虫を含む囊胞(cyst)。この発見が、マ

ラリアの治療に繋がった「原著 三三三」

八行ずつ四連から成る三三二行の詩で、各連とも、二行目、四行目、八行目が押韻する (thing, sting, remembering/Sun, enspun, one/ring, bring, remembering/small, bawl, all)。各連とも五行目は八音節、六行目は四音節、他は全て六音節 (但し最終連の七行目は七音節) の整然たる形で、偉大な医学上の発見をした喜び ('We found' を三回使って!) と、その貴重な発見も時が経って世間に忘れられることを諧諷を込めて嘆いてみせた佳作。次も同じ作者の詩。

科学 Science

私は鉄の両腕を喜びたい、それでもって
気高くも報酬を軽蔑して、
敢えて〈真理〉にのみ従って、それから
その真理を教えてきたのだから―生ずる憤怒も恐れずに。
高々と積まれた記念碑は彼らのものでない、彼らは選んだ
のだ

真理の優れた 知られていない労苦を―燃え上がる死をで
はなく、

彼らには甘美だったのだ 散文の詩性は、

しかし智慧は与えたのだ 彼らの呼吸に芳香を。

ああ何と！ 我らは眠って甦をかいて夜中を過ぎてゆく、

尤もこれら偉大な人々は夢見るのではない昼日中を示すの
だが、

しかし彼らは持ち堪える―純然たる〈光〉の〈息子たち〉

は―

そして、水平にした角灯の風変りな輝きが無くても

露あつらに示すのだ 我らが行かねばならない開放された道を。

(二四七)

全て十音節行の一三行詩で、A B B A A C A C D E D E E
と押韻する作品。科学者の「鉄の両腕」である「彼ら」、
即ち〈光〉の〈息子たち〉を讃えようとする。

*

英国の詩人・音楽批評家・劇作家ターナー (Walter
James Redfern Turner, 1889-1946) は、甚だ潤色に富む詩
が特色とみられているが、次作は、本稿の話柄そのものの

標題の作品。

詩と科学 Poetry and Science

夜は、大空の銀色の〈孔雀座⁽¹⁾〉のように

〈月〉に魅惑されて多くの何千もの眼を

うつろに変える。薄れゆく靄の中を素早く飛んでゆく

〈彗星〉の尾が、〈太陽〉の〈不死鳥〉が、

その白くなつた灰の燃えている巢から吹き飛ばされて。

もしこれが偽せの姿ならそれは錯覚によつて得るものだ、

我らが知るものは全て真昼の夢にすぎないのだから、

太陽、月、そして星々―それらは〈空想〉の名前なのでは

ないか、

それらのように 自動の錯乱状態で〈光〉に狂わされて

運行する人間の天体の産物なのでは？

光の目も眩むばかりの欲望は 目に見えない青虫のように

原子の小さく暗い核の中で孵化して

〈竜〉となつて飛び出すが、その百科事典そのままの種^{たね}は

翼を芽生えさせるのだ、〈博物学〉に―赤、青、黄色と、
クロッカス⁽²⁾、オーク⁽³⁾、グリフィン⁽⁴⁾、マンドレイク⁽⁵⁾、タンポ
ポ⁽⁶⁾を。

〈光〉の子孫の最も新たに得られたもの⁽⁷⁾は

〈プロトン⁽⁸⁾〉と〈ニュートロン⁽⁹⁾〉がまだ未発見の親族で

誕生を待つており 未だ書かれていない物語の

不可視の名無しの英雄であり、フィルムの中の星々で

巻き展げられたか、記憶されていないか、取得されていないな

いかだ。

人間の果てしない幻想は行列をなして溢れ出る、

〈暴虐な指導者たち〉〈王たち〉、〈大統領たち〉と、

靈魂の飢えによる妄想は キリストと仏陀、

更に漠然とした構成物は 〈罪業〉、〈進化〉―

あのオオウミガラスの卵、〈人間の想像力〉。

しかし子供たちは、成長して、お伽噺を現実だと受け取る

成程、それは現実だ、ハンス・アンデルセンの現実の物語

群だ。

最も純粋な虚構話以外に真実はない、

しかしその真意のせいで誰も、言ったり、言っているとか
少なくとも唯言うだけだという振りはしない、これが私の

〈夢〉なのだ。

これは私の夢なのだ、〈世界〉は全て一つだというのが—
石また石、木々、鳥たち、人々、光、イエスと〈悪魔〉。
苛つてはならない、〈変化〉の螺旋のどの段階にも

何故なら全ては〈変化〉であり、しかも永遠に〈一つ〉な
のだから、

愛、憎しみ、悪行、美德は 一つの全体にぴったり合つて
ゆく。

要するにこういつた言葉は言葉であり、言葉は夢なのだ、
全ての言葉—科学者のも、詩人のも、哲学者のも、そして
聖職者のも

(君は夢というものは好きなのか? ことによると好きで
ないのか?)

しかし思考は全て〈空想〉の純粋な花であり
誰かによって愛されているのだ 花が全てそうであるよう

にささえ。

私はそれら全てが好きだ、非常にかそれ程でなくか、

観念は醜いか美しいかだ 花々や婦人たちのように

私には言えないのだ くだらないと思いつながらそれでも尚

好きなのがある理由が。その他甚だ稀な美を備えていて

私を新たな喜びで満たしてくれるものがある。これが私の

夢なのだ。

(二六〇—六一)

訳注

(1) Peacock [= Pavo] 南天の星座

(2) Crocus アヤメ科クワカス属の球根草の総称、花言葉

'youthful gladness' 「若き日の喜び」

(3) Auk 北方海洋産のウミスズメ科 Alcidae の潜水性の鳥

の総称

(4) Griffin ワシの頭と翼、ライオンの胴体を持つとされる

伝説上の怪獣、アポロンの聖獣

(5) Mandrake *Mandragora officinarum* 麻醉性有毒のナス

科植物、多肉質の根は二つに分れて人体を思わせ、地面
から引き抜かれる時叫び声を発すると言われた、媚薬と

する俗説もある欧州産。花言葉「恐怖」。民間語源では根が人や竜に似ていることから「MAN+DRAKE人間(古・竜)・と解釈

(6) Dandelion 欧州原産、葉は葉用、花言葉「love's oracle」「恋の託宣」「coquetry」「媚態」、中世仏語 *dent de lion* 「ライオンの歯」から

(7) 一群の素粒子の構成要素となつている粒子クォーク(quant)を指すだろう。その後次々に発見されている

(8) Proton 陽子。原子核の基本的成分を成す素粒子、電荷は正で電子の電荷に等しい

(9) Neutron 素粒子の一つ、電荷は0、質量は陽子よりは僅かに大きく、スピン $\frac{1}{2}$ 、水素を除く全ての原子核の重要な構成要素

(10) Great Ank オオウミスズメとも

殆どが十音節行の五行詩九連から成る。押韻はしない。読者はこの「詩と科学」が展開する心象を追いながら、作者の「夢」を一緒に夢見ながら色々々と考察を誘われることだろう。

*

次は、科学者の発見を活き活きと伝えるドロシー・ダネリー (Dorothy Donnelly, 1903-94) の作品である。

桃色夕二 The Pink Mite

科学は虚構を忌み嫌う、その強みは事実であること。

事実としてそれは月に飛んでゆくだろう(かつては虚構に限られていた芸当)、鼠を証明するのに山を動かすだろう。

その目標は、人類同様古く、問いと答の連続である――

「どのくらい地球の下まで生命の印は、絶滅にしろ残存にしろ及んでいるか? その難儀な旅の痕跡は最後まで存在するのか?」

比類なき真珠を探し求める商人たちの熱意で

科学者たちは 答を探し求めて押し進んだ 生命をかけて危険な(極)に向かつて、そして最後のペンギンを追い越して寒冷の世界で、それを見つけて心臓を暖めたのだ

ダニの――その同族の桃色の極小の尖頭イルクに牧夫なら露営出来たほどだっただろう 雪片の下でも。しかし大き

さはともかく、

それは全くライオンのように活発で、大いに寛いでいた極めて固い氷の上で ナイル河の青草繁茂のぬかるみの

中の鰐のように。恐るべき大気の中の生き残りとしてそれは証明していたのだ

どのくらい遠くまで生命はその種子を植えつけに行けるもの

のか、孵化させながらだが

この惑星の厳寒極まりない島で極小のものを、
地衣類を好む桃色の歩行性ダニを。

そして付き添われもせずにその幼虫は歩み出す 居心地の

よい卵から、八本の裸の足と小さな無毛の頭のまま、

その時それは寒いだろうか？ それが口を広く開けてこの
荒野で口を一杯に満たす時、それは撃退されるだろうか？

おお そんなことにはならない！

羊の群のように草へと導かれながら その桃色ダニは草を
食べるのだ

極地の牧場で、草地の羊のように満腹して。

「南極近くで桃色ダニ発見される——これまで動物の生命が生存
していると知られていなかった極地に更に近く……百分の一イン
チの長さのダニ……科学者たちのチームによって発見された……」

『ニューヨーク・タイムズ紙』特報 (二七一一七二)

十音節から一五音節の詩行の、六行詩四連の押韻しない
自由詩である。新聞記事に触発されての作者の、この世で
の小さな生命に対する感動が、奔放な想像力と華麗な譬喩
で表明されている。

同じ作者の作品をもう一篇。

星と比較された蜘蛛 Spider Compared to Star

(ウォルター・ヘンリー) (for Walter)

もしも光を放つ蜘蛛を注意深く考察するなら

(しばらくの間紫色の紫苑の積み重なるの背後を動いてい
たが 今 姿を現して、脚を光線の中に外側に拡げて

八本の車輪の輻は中心から曲がって青白い紙の上に間隔を
とって置かれた星形のようにきらきら輝いている) 彼女は
星のようにみえる。

頭と楕円形の口はびったり連結していて

二重星の合体してゆく軌道のようにだし、リゲルのように

彼女には首がない、Sは結局白鳥を表して星ではない

それだと渦巻状で、アンテナ、角、尾なしで済まし、

保持しているのは（蜘蛛の場合も）唯、伸縮自在な光線の
花輪だけで

それによつて空気のきらめきが その周囲で動き始める。
彼女は（金星）、猫の眼のようにきらめくダイヤモンドの
眼を備え 蠅の大きさの小花の中の黄金の四箇の完璧な
四方の先端が尖つた星々のように正方形だ。

彼女は持つているのだ、餌食を待ちながら、あの漁夫たち
の「何百万年」もの

舟に在つて頭上に燃え立つような忍耐力を
（十億対一とは大雑把な時間の関係で

蜘蛛の夜の時間は星の生命の三百万年に

等しい。）彼女はまた、黙してもいる、年月同様、
絶滅した星の石のような光と同じく静まつていて

遅くなつて我らの所にやつてくるのだ 恐竜の足跡の花の
ように、

もしくはアンモナイトの金線細工風の縫合線の渦巻状の花
飾りのように、

（中生代の）⁽⁴⁾ 日々が海のガラス質の下に非の打ち所なく保
たれているのだから。

六月には 黄金色のニワオニグモ⁽⁵⁾が漂う
ゆつくりと淡紫色^{アライグマ}の空を横切つて、

目的もなく、かといつてぶらぶらしているでもなく、自ら
の網は薔薇の梁から梁に釘付けにして、彼女が足で揺する
のは

菱形^{ダイヤモンド}の輪郭図で、点々と付いている黒い金色のエナメルは
ブユで、⁽⁶⁾ 氣を失つて動いている、マルハナバチの流星雨⁽⁷⁾と
大氣を炎立つ鞭で刺しているホウキバチとの真直中で。

秋になるとダリアが各々ルビー色のランプを灯し^{とも}
金めつき付けの葡萄の葉が垂れ下がつて風雨の波によつて

古びて巢にひっかかると、

蜘蛛たちは動き回る 黄色い百日草の間を

丈高い菊の間を、菊はシナモン色で曲がり込んだ花びらに
花びらが重なつて中まで固い球体球体へと内側に向かい、
それぞれの軌道内を点から点へと動いてゆく、大きな割れ

目の上を足元確かに

眼に見えない橋々を渡つてゆく 高空の星々のように。

靈妙な天空が草地の上を一足、二足と伸び広がっている
上方の空気の大海のガラスの中を縮小してゆくように。

そこには太陽と星座紛いが幾つも存在する、アルデバラン星⁽⁸⁾がぼんやり大きく現れてくる 銀色の二等

辺の中に

そしてくつきりと南極老人星⁽⁹⁾は一杯の光に捕えられて。

蜘蛛の巣の乳白色の道また道が牧場を横切つて光り輝き

銀河が庭々の上に黒い鳥々をなして懸かり

予測できない月が多く現れる、

ライラックの影のせいでレモンの黄色や白色となつて、

そして惑星のように粘り強い螺旋形の通路で向きを変える。

〔幾何学、即ち、空間における

調和の科学が あらゆるものを支配している。〕

静寂のうちに聞こえてくる 雄弁な蜘蛛たちと星々とが

話し合っているのが 議論の余地のない声々で事物につい

て、

言っているのだ 確かに演繹しうるものが推論に先立つの

であり

事物が必然的に理論に先行するのだと、彼らは言っている

物質は音楽であり虹色の声で歌うのだと

石から石へとさまざまな色で動く水のようにと。

原始音階の調子に基づいて建てられた繰り返し発生する主

題が現れるのだ 今ここに今はあそこにと豊かに混同し

ながら、

青色の鳥々は上の方で（銀河の）川の中に、

すると白い（大熊）が極地の空を歩いてゆく、下の方では

草の中に空の木魂が、ブレイアデス星⁽¹⁰⁾の

露の玉のかすみ⁽¹¹⁾が、そしてタランチュラ⁽¹²⁾がきらめいていた

小さな星々の間で猛り立っている黄金のアルゴルのよう

に。

(二七三—七四)

訳注

(1) ギリシャ神話では、知恵の女神アテナーが、傲慢にも

機織りの競争を挑んだりユーディアの少女アラクネーを

罰して変身させたのが蜘蛛とされている。仏語でも蜘蛛

は、「ラレーエ」「Taignée」で女性形

(2) a double star 望遠鏡で拡大しないと一つに見える二つ

の星。観察者から殆ど一直線上にある見かけの二重星と、

互いに近くにあつて引力によって軌道運動をする連星の

二通りある

(3) Rigel オリオン座のβ星で一等星

(4) Mesozotic 顕花植物の出現、恐竜の出現と消滅、が特色

の二億三千万—六千五百万年前の期間

- (5) garden spider 庭でよく見かける蜘蛛の総称、欧州に多いクロキコガネグモなども
- (6) gnats 双翅類の吸血性の小昆虫の総称、ユスリカ、ヌカカ等
- (7) a meteor-shower 地球が流星群を通り抜ける時、多数の流星が一点から発散しているようにみえる現象
- (8) Aldebaran 牡牛座 (Taurus) の中のオレンジ色に光る一等星、ヒヤデス星団 (つりがね星) の中で一番明るい星
- (9) Canopus 竜骨座 (Carina) のα星で一等星、全天でシリウスに次いで二番目に明るい星
- (10) Pleiades 'the Seven Sisters' とも。牡牛座で目立つ星群。獵夫オーリオンから逃れるために星になったアトラースの七人の娘。そのうちのメロペー (Merope) は「消えたプレイアス」(the Lost Pleiad) と呼ばれ、人間を愛したことへの悲しみと恥じらいから姿を隠していると言われる。七星のうち肉眼では六つしか見えない
- (11) tarantula 大型多毛の毒グモの総称。ここでは「Tarantula nebula」[タランチュラ星雲]を指す。大マゼラン雲中に見られる巨大で明るいガス星雲
- (12) Algol ペルセウス座の二等星。「Demon Star」[悪魔星]とも呼ばれる

十—一七音節の詩行が四詩節(各、五、一八、一四、二五行) 総計六二行の自由詩。地上の蜘蛛の、微細な描写から天上の星の姿へと作者の眼が自在に行き届き、星と蜘蛛との会話を聴く作者の、これは観察力と想像力の不思議なまでの合体が形象化された作品で、その輻輳した豊饒な世界に読者は魅了されるだろう。星と蜘蛛とが頭韻の語である発見?からの着想かと思いたくなるが、この作者の更にもう一篇も、頭韻の語彙が標題である。

恒星と藁 Suns and Straws

林檎の落下は 星の落下のように
壮大な行動ではないが、一個の林檎は
落下すると、彗星の評判にまで高まった、
ニュートンが、それに気付いて、その落下の
ひらめきの中に、万物の 落下の法則への糸口を
見た時に——藁と石、樫の木々
と 雀らと毛髪全ての。しかし大地は 嫉妬深い
羊飼いが自分の群の羊に熱意を示すように、

身に帯びた大きな磁石で あらゆる物質の散らばった断片を引き戻して 自らの所有にする。

泉のヴェルサイユ宮殿を創り出すとは！

(二七五)

(神秘に富む物質——音の出ない、計り知れない、暗い、破壊できない物！ いつも

形の指示するままに、それは^{かたど}躰を与えるのだ
蚤に あるいは花に、あるいは虫を太らせる、
あるいは虎を毛皮で覆う。) 原子一個も失われはしない

ふつくらした惑星の曲線美の体格からは。

林檎と林檎の形をした大地は、各々

その軌道の中で、立つか倒れるかだ 適応させられて
いる法則によって——^[1] 天球の悉くが聴いている

あのパイド・パイパー音楽、それは何百万もの恒星を動かすのだ

空間の中で、そして星雲の群れを集める。

何たる(曲芸師)か、銀河を皿のように手玉に取りながら
あの天空の花冠を回転させ

それによって空一帯に 百合とばかりに輝く光と

訳注

(1) Pied Piper ハーメルンの笛吹き、ドイツ民間伝説の英雄・魔法使い。ロバート・ブラウニング (Robert Browning, 1812-89) 作の *The Pied Piper of Hamelin* (1842) によって有名になった。小文字で、「特に空約束などで」人をつき従わせようとする者、無責任な約束をする指導者」の意の普通名詞として使われる

各行の音節数七〜一二の、五行詩五連から成る、前作とは一変したすっきりした構成の作品で、恒星から彗一本にまで働いている宇宙の原理の重力と、それを利用駆使する人力とに思いを馳せた佳篇である。押韻しない詩だが同語 'fall' を敢えて六回反復する他にも、f音で始まる十五語、s音のそれ十四語など、作中で頭韻が頻用される。

*

ロバート・コンクエスト (Robert Conquest, 1917-) の作品があるのでそれを見てみよう。

彼はオックスフォード大学で学び、外務省に勤めた詩人

で、伝統的な形式に依る明晰な文体で、知性・機智・皮肉などを重視した“The Movement”（動態）派詩人の代表的な存在として注目された。ソ連史を専門とする歴史学者として聞こえ高く、二〇〇五年にはジョージ・W・ブッシュ大統領から「大統領自由勲章」を授与されている。

人間性 Humanities

催眠術をかけられて告げられる 赤い色を見ているのだと
実際には黄色い壁を眺めているのに すると

その子供たちは そうではなくオレンジを見ていたと話す、
そのような言葉のレンズを通してあのような虹に分割され
ると

人間の充実ぶりの全てを一つの存在として
見るのには 心全体の努力を要することになる。

客観的な呼吸で発生される言葉は

情緒的なものを選び分ける風であるに違いない、
音楽は内部の海を一般化して引き出すのだ。

盲目にされた心の 暗い基音ハートモニックの音と倍音オクターブになって、

しかし確信で熱くなり 不信で鋭くなつて
韻文は汗にして出すのだ 真情溢れる知識を、澄んだ眼に
よる芸術を。

紙製の薔薇に我らがくしゃみする時、その出来事は
精神上のものか それとも現実のものなのか？

言葉は我らを凍らせてそのような範疇に到らせるが
それでも韻文は言葉の鏡を暖められるし

そのぼんやりした歪みを通して表現出来るのだ
その情景を、心を、生命いのちを、それらが発生するがままに。

―夢の青さにか 日没の青銅色にか

詩人たちは愛と驚異の心象を次々探し求めるのだ、
だが 音楽の絶対的なもの、黄金とか白鳥は唯の泡うたかたに
すぎなくなる もしそれら心象が膨らませるのでないなら

沈鐘のように詩歌の水面下で
鳴り響いている 科学のあの妙なる調和を (二九二)

全て十音節詩行の六行四連が、A B A C B C の型で正確
に押韻する詩である。詩人が詩人としての真価を発揮した

成果を形象化出来るのは、詩歌の水面下で妙なる響きを奏でている沈鐘―淵や池、沼、湖、海の底に沈んでいるという伝説の鐘―を探り当てた時で、それが〈科学の詩〉だと示唆する秀作ではあるまいか。尚、一九二二年にノーベル文学賞を受賞したドイツの劇作家・小説家ハウプトマン (Gerhart Hauptmann, 1862-1946) の神秘的象徴作品『沈鐘』 *Die versunkene Glocke* (1896) は有名である。

*

次の余りにもあからさまな? 〈科学〉の詩はどうだろう。ウィリアム・ブロンク (William Bronk, 1918-99) の作品である。

不確定性が我らを確定する有様

How Indeterminacy Determines Us

我らは甚だ僅かしか識別できない、非常に多くの無の場合のように、我らの私事わたくしごとなのだ。時々、我らをどきとさせるのは、世界は我らのものだ。それは唯、我らのものだけだ、そこで動いている。あるいはそうだと思う他者のものは、どこか他所にあり

別世界にある、

彼らの世界だ、唯、我らが見るのは時から時へとであり――粉砕されている、まるで我らが無であるかの、いや安定していないかのように――時々我らに見えるのは彼らが見ているもので

我らが知っている世界ではない。彼らのものだ。馴染みがない。まるで

電荷をほんの少しばかり一瞬変えること

によって、銅が炭素になり炭素の重量と

原子価を惰性と反応との変化した場に

感じ取り、それから再びまた銅色の世界で

銅に戻ったみたいだ。我らを取り残されて驚嘆し、

熟考する。我らの私事を、そして次のように熟考する、

我らは単一の方程式で示される二つの未知数、我らと

我らの世界であり、他者の一つが作用するのだ。視覚は

内側にあり、己自身を見るのであり、聴覚、触覚は

内側にある。何を我らは知るのだろうか。外側の世界について?

(二九二)

標題にある「不確定性」とは、無論、ドイツの理論物理

学者・量子力学の創始者でノーベル物理学賞受賞者（一九三二）のハイゼンベルク (Karl Werner Heisenberg, 1901-76) が定式化した量子力学の原理である「不確定性原理」'Uncertainty Principle' のことであるが、原著に次の注がある。

「測定では素粒子の位置とその運動量を共に正確に決定できないので、それらの値の不確定の結果がプランク定数より少なくなる。この定数は普遍定数で、これをエネルギーの量子の頻度に乗じることその量子にエネルギーを与えられるのである。プロンクの詩はこの原理を譬喩で拡張して、次のような考えを表すもの。即ち、観察者が変わり自らの観察する事柄によって変えられると、それ故外側の世界は本当には知ることが出来ないのだ、という概念である」(三三四)

「プランク定数」'Planck constant' とは、量子力学の基本定数で、放射の一量子のエネルギーと放射の周波数との比を表すもの。ドイツの物理学者・量子論 (quantum theory) の開拓者、ノーベル物理学賞受賞者（一九一八）のプランク (Max Karl Ernst Planck, 1858-1947) に因む。音節数が、八〜一四（一〇〜一二が中心）の押韻なしの

一九行から成る不確定な自由詩である。

*

「ラマルク説」(Lamarckism) なるものがある。フランスの博物学者・進化論者のラマルク (Jean Baptiste Pierre Antoine de Monet de Lamarck, 1744-1829) の学説を基にした進化思想で、習慣や用不用によって獲得された特質は次の世代へ遺伝するというものだ。「用不用説」(use and disuse theory) である。そのラマルクが標題の作品をみてみよう。作者は米国の詩人、リチャード・ウィルバー (Richard Wilbur, 1921-) だ。この詩は実は彼の第三詩集『この世の事物』*Things of This World* (1956) に収録された作品。この詩集はピューリッツァー賞と全米図書賞を受けたのだった。

練り上げられたラマルク Lamarck Elaborated

「環境が動植物の器官を造る」

'The environment creates the organ.'

ギリシヤ人は間違っていた 我らの眼は光線を持つと言ったのは、

こういう眼窩とか光を放つ棒から
やって来るのではない 我らの日々の照明は。
こういう二つの青い穴を開けるのは太陽だった。

耳を招いたのは鳩たちの歌だったし
その耳が音を最初に思いついたのではなかった、
その器官は、振動する大気の中で花開いたのだ、
音楽がイリウム⁽¹⁾を地面から魔法で呼び出したように。

柔順な水、反抗する石、
有毒な漿果と燃え上がるような薔薇は
道理上 無神経な指の骨を装^{よそお}ったし
味蕾をこわばらせ 鼻を唆^{そそ}かした。

我らの生き生きとした環境から求められずにやって来たのだ
あのこの上なく恐ろしい薄暗さ以外のあらゆる感覚が。
釣合^{マインド}いの取れた貝殻が 思考の海の中で転がる。
精神^{マインド}だったのだ 頭に泳ぐことを教えたのは。

ニュートン⁽²⁾数が宇宙の堅^{リッ}琴と調子を合わせて

我らを圧倒した 我らには知る由もなさそうな渦巻き続け
る世界また世界で

そして我らの様々な欲望の想像上の流れによって
セイレン⁽³⁾たちの声が 我らに眩暈^{めまい}を与えた。

(二九五)

訳注

(1) Iium 古代トロイのラテン語名

(2) Newtonian numbers ニュートンの業績を象徴させたものだらう

(3) Sirens シシリー島近くの小島に住む上半身女、下半身鳥の姿をした海の精。美声によって島の近くを航行する船人を誘惑して難破させた

全て十音節詩行の四行詩五連がA B A Bの型で押韻する
詩で、人間の感覚の起源・性質について、ラマルクの進化
説を作者が改めて想起し考え直した成果の形象化というところ
だろうか。如何にも専門^{プロ}詩人の作らしい詩。

*

次は、英国の劇作家・詩人・小説家、そして医師である
ダニー・アブジ (Dannie Abse, 1923-2014) の作品である。

アレックス・コンフォート⁽¹⁾への手紙

Letter to Alex Comfort

アレックス、おそらく僕らのどちらにも夢にも見たことのない
かった色が

試験管の中に現れるかも知れない　どのような忠告なのか
は〈神⁽²⁾〉のみぞ知るだが。

エールリッヒは確かに、精神の扉を打ち壊した人だった、
それでも六百六回目の試み⁽³⁾の後によりやく。

コッホ⁽⁴⁾もまた、困難を極めた挙句、真のドイツ人の徹底ぶ
りにより

起こり得ないものを排除して証明したのだった　我らの余
りにも多くが

同じ病気で死んでいることを。眼に見えるよ、スライドの上
に遂に―〈死〉を―そして太古からの大きな悩みの種⁽⁵⁾の
僅かな病原菌を。

依然として僕は、僕自身、ドイツ人は好きになれなくて、
選ぶよ　もじやもじや頭の

航行者たちを、彼らときたら、太陽に逢うと酔っぱらう蝶
のように

唯よるよる曲がりくねって　ほーっと霞んだ大気の中を行
くだけで

到達できるんだから、うっとりさせられるよ、それぞれの
目的地にまるで偶然のようにだよ。

あのギリシヤ人⁽⁵⁾は、だから、僕にとっては英雄なのだ　浴
槽の水が

自分の臍の上上がるのを凝視めて裸のまま飛び出して
「見つけた、

見つけたぞ」と街路で全身を光らせながら叫んで　他の人
々が彼の性器を

じろじろ見ているだけなのも忘れていたのだから。
全く笑えるつたら！

かと思えばニュートンは、ウールスソープ⁽⁶⁾で庭の壁に寄り
かかりながら、

自分の消化不良症やそのような些細な事は全く忘れて
ぼかんと天を眺めて唯　驚きながら　他でもない

重力で林檎が垂直に落下するのを目の当りにしたのだった。

おお何という驚くべき観察！ 誰が考えただろうね

そのようなありふれた驚異が歴史を変えられるなどと、

それ以後は、誰もが落下しなければならぬのだと どの

ような

階層の人であれ一秒ごとに三十二フィートずつ、一秒ごとにだよ。

君もまた、僕は知ってるが、扉がぱつと開くのをずっと待っていたのだ

君の興冷めな化学製品を操作し、長い手紙を次々

〈出版社〉に書き、真実に恐る恐る耳を傾けて、深々と

のたくる大地を掘り進んでいったのだ、正直な鋤で虹を求めて。

しかし何も現れない。幽霊も、油性物も、愛も。

それで例の老教授は 君が狂ったと思うに違いないよ、

アレックス、君が

実験室で誓約のように詩を暗唱したり、あの才気走った科

学者たちを呪う時に、

彼らは鳩の翼や憔悴した心臓をばらばらにし切断するのだからね。
(二九六—九七)

訳注

(1) Alex Comfort (1920-2000) 英国の精神科医で老人学者、詩人

(2) Paul Ehrlich (1854-1915) ドイツの細菌学者・免疫学者・化学療法の先駆者、砒素化合物「サルヴァルサン」
‘Salvarsan’ (arsphenamine の商品名) 「スピロヘーター」による病氣(梅毒、ワンサン氏口内炎)の治療に用い、「六〇六号」の名で知られた」を合成・創製して、それが梅毒に効果のあることを示した。ノーベル生理・医学賞受賞(一九〇八)

(3) サルヴァルサンは、エールリッヒがテストした六百六回目の合成物で、彼の学生だった秦佐八郎 [1873-1938] 細菌学者・ペスト菌を研究、北里研究所員、慶大教授」の助力を得て成功したもの(原著 三三四)

(4) Heinrich Hermann Robert Koch (1843-1910) ドイツの細菌学者・近世細菌学の祖、炭疽、結核、コレラの病原菌を発見・分離した。敗血症、マラリアなどの研究を行

ない、ツベルクリンの発明者、ノーベル生理・医学賞受賞（一九〇五）

(5) アルキメデス (Archimedes, 287?-212 B.C.) ギリシャの数学者・物理学者・発明家、「アルキメデスの原理」を発見した時の有名なエピソードとされるものに言及。シラクエース王の王冠の黄金の純度を測定する方法を発見した時の喜びの叫び「ユアリーカ」'eureka' (= I have found [it]) は、現在、米国カリフォルニア州（一八四八年に同州で砂金が発見された。翌年世界中からその砂金を求めてどっと人々がやってくるが、彼らを世に（四十九年びと）'Forty-niners' と呼ぶ）の標語になっている

(6) Woolshorne アイザック・ニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) はイングランド東部の北海に臨むリンカーンシャー (Lincolnshire) 州のこの地に生れた

一一〇一 九音節詩行の四行詩八連が、A B C A の型で押韻する軽快な作品で、〈医師・詩人〉の面目躍如であろう。

*

次は、ジョン・ウッズ (John Woods, 1926-95) の面白い作品である。

ソネット集の司会者に To the Chairperson of the Sonnets

私がニュートン信奉の青年期には、愛の歌共が甘やかな唾液を私の顎から滴らせた。

緑の世界が近づき迫ってきて

二つの途方もなく目立つものになった、

おとこ おんな おとこ おんな

私のまぬけな数字では 足し算と引き算。

何故 偵察指揮者が町を

真夜中に去ったのかは

私には難解だった

〈馬頭星雲⁽¹⁾〉の

背後の光輝と同じように。

世界は裸になってゆき

その最後の顔^{フェイス}だけになり、火^{ファイア}が飛び跳ねた

陰極と陽極との間に、

股間の体毛は渦巻いた、鉄のやすり屑は

磁石の周りを流れてゆく。

その後、私がアインシュタイン信奉の日々には

誰かが私のブルージーンズを身につけて町で楽しんだ。

揺らめく光が暈で取り巻いた トランクスの下着サポート

ーを

暗いロッカーの中にあつたのだ。

線の何本かが或る詩篇になり

彼らの臀部を示した。

空間は濃密だった 〈バルサー⁽²⁾〉で、

クエイサー⁽³⁾で、左旋回性⁽⁴⁾の中間子⁽⁵⁾で、

あの「不思議な」素粒子⁽⁵⁾で。

私は二度見なければならなかった

私が手の中に持っているものは何でも。

親愛なる ソネット集の〈司会者〉殿、

あなたは、いやあなたは何処^{どこ}で、髭^{あごひげ}を生やしたのですか？

何処^{どこ}なのですか？ 眠るのに頭を乗せるのは、愛しい人よ、

スペクトル⁽⁶⁾のどの端にですか。

訳注

- (1) Horsehead Nebula オリオン座にある馬頭形の暗黒星雲、不透明な宇宙塵から成る。因に、科学雑誌 *Newton* (ニュートンプレス社、二〇一四年一二月号、一〇八頁) に、Bill Snyder 撮影の素晴らしい写真が載っている
- (2) Pulsars 銀河系内でパルス状電波を規則的且つ持続的に出している天体の総称
- (3) quasars 太陽系から四十一億光年の距離にある約四十の天体の一つ、強力な電波エネルギーを出す
- (4) mesons 電子と陽子との中間の質量の素粒子の総称
- (5) particles 物質を構成する最も基本的な粒子
- (6) spectrum 電磁波(光を含む)の強度を波長や振動数、またはエネルギーに従って順に並べたもの

語り手が、自らの科学知識の進展をさつと回顧しながら、その知識を軽快に使用して、当時当時の切り取った風俗、状況を叙述してみせた。譬喩が巧妙である。

*

続いて、米国の詩人、ゴールウェイ・キネル (Galway Kinnell, 1927-2014) の作品がある。フランソワ・ヴィヨンや、イヴ・ボヌフォアの訳詩集なども出している。

(三〇二)

失われた世代のために

For the Lost Generation

特異な性格が情報の総体を組み立てた。

$E = mc^2$

は もう一つの超自然的な

記号でユダヤ人の存在を表すものだった。

そしてパリ！ ある人の屋根裏部屋での午後ずっと

我らは各々のグラスを上げて

徹底的に飲んで

世界を論じて 神経症になった。

我らの一行は素晴らしかった、

誰もが米を投げた、

この上なく太った女たちは素的だった、

世界には気の利いた言葉と紙吹雪が豊富だった。

その〈戦争〉は最初の妻、誰かの犬へまだだった。

誰が正しかったか、誰が失われたか、

誰の利益にもならなかった、

頂上にいる犬は 下の犬同様悪質だった。

時々ウイスキーの後で、夜明けに、

顔に当惑の

兆しがあった、

蒼白を遠くへ続ける青い夜な夜なの顔に。

その全てを振り返って見よ——遙か彼方の犠牲を、

大破壊と結構な気の塞ぎを

(おお広島、おおユダヤ人)——

どの世代も失われた世代ほど華やかなものはなかった。

(二〇三)

四行詩六連が A B B A の型で整然と押韻する作品で各
行の音節数は四〜一二とばらついているが一連全体の音節
数は三〇〜三五で、ほぼ統一されている。

第一連二行目の 'E = mc²' は 'E equals m c squared'
と読むもので、次行末の 'weird' と正確に押韻する。こ
れは言うまでもないが、アルバート・アインシュタイン

(Albert Einstein, 1879-1955) によって発見された幾つかの恒等式の総称、特に質量エネルギー方程式（一九三二）で有名なもの。尚、彼はユタヤ系だった。

原爆の大惨事とホロコーストも喚起しながら、パリでの〈失われた世代〉たちの集まっていたサロンの光景を浮上させたもの。

*

小説〈ウサギ四部作〉で特に有名な米国の小説家・詩人ジョン・アップダイク (John Updike, 1932-2009) の作品二篇がある。

復活祭での七連詩 Seven Stanzas at Easter

間違つてはならない、もし〈彼〉がいやしくも立ち上がったとしても

それは〈彼の〉^{からだ}体としてだった、

もしその細胞の分解が逆方向に進み、分子が再結合し、ア

ミノ酸に再び火がつくなら

〈教会〉は崩壊するだろう。

それは花々としてではなかったし

各々再び現れる穏やかな〈春〉でもなかった、

それは十一人の使徒たちの口の中と酩酊した眼の中の〈彼の

の聖霊〉としてではなかった、

それは〈彼の〉肉体としてであった、我々のものだ。

その同じ蝶番で動く親指と爪先、

その同じ有弁の心臓

それは―刺し貫かれて―死んで、衰えて、中断して、それ

から再び集めたのだ 不朽の〈勢力〉から

包み込む新しい力を。

〈神〉を嘲けつたりしないでおこう 暗喩で、

類推で、横への一歩避けで、超越で、

出来事から寓話を作り、初期の時代の色褪せた信じ易さに

粉飾された記号を作りながら、

扉を通って歩いてゆこう。

その石は後へ転ってゆく、紙張り子ではなく、

物語の中の石でもなくて、

物質らしい巨大な岩であり時のゆるやかな擦り砕きのうちに
我ら各々のために覆い隠すのだ
一日のあまねき光を。

そしてもしも我らが墓場で天使に逢うなら
それを真物の天使にしよう、

マックス・プランクの量子で重くなった、毛髪で生き生き
とした、曙の光でぼんやりした、明確な機^{はた}で紡がれた
真物の亜麻布の衣を纏った天使に。

それを余り奇怪でないものにしてしまうとほしないでおこう、
我ら自身の便利のために、我ら自身の美の感覚のために、
我らが 考えられない時間に目覚めてその奇蹟に戸惑わせ
られたり

諫言に押し潰されたりしないですむように。

マサチューセッツ州マープルヘッドのクリフトン・ルター派教会の
支援による宗教芸術祭のために書かれた。(三〇七―八)

四行詩が標題どおり七連から成り、A B C A の型の押韻、

各行の音節数は不規則だが、各連とも三行目が飛び抜けて
多く、一九〜二七音節行の構成である。(彼)はイエス・
キリストを指すが、如何にもアブダイクらしい皮肉の利い
た洒落た詩である。

宇宙瘤 Cosmic Gail

毎秒これら数千億個のニュートリノが我らの身体の各々一平方
インチを通過する、昼間は上から夜は下からやって来て、その
時太陽は地球の反対側で輝いているのだ！

『アメリカの科学者』所収の、M・A・ルーダマンとA・
H・ローゼンフェルト著「入門素粒子物理学に関する説明記述」
より

ニュートリノ⁽¹⁾、彼らは甚だ小さい。

彼らには電荷がなく質量がなくて

全く相互に作用しない。

地球は単なる単純な球体なのだ

彼らにとつては、その中を彼らは素通りする

通気の良い広間を降りてくる塵埃⁽²⁾嫌のように

あるいはガラスの板を通り抜けるフォトン⁽³⁾だ。

彼らは最も優れたガスを鼻であしらい、

無視するのだ 最も堅固な壁を、

冷淡なあしらいをする鋼鉄と響きを立てる真鍮を、

侮辱するのだ 馬小屋にいる種馬を、

そして階級の障壁を軽蔑しながら、

浸透するのだ 君と私に！ 大仰な

無痛のギロチンのように、彼らは下へと

降りて我らの頭を貫いて草中に入る。

夜中に、彼らはネパールで入り込み

恋する男とその恋人を貫き通す

寝台の真下から——君は呼ぶ

それを素晴らしいと、私はそれを呼ぶ 粗野だと。

(三〇八)

訳注

- (1) Neutinos 中性微子。放射性崩壊の際に電子、陽電子と共に放出されるレプトン (lepton) の一種、質量は実質的なゼロ、電荷ゼロ、スピン $\frac{1}{2}$ 。レプトンは、軽粒子。スピン $\frac{1}{2}$ の粒子の総称。強い力を受けず、クォーク

(quark) やその小単位で形成されない

(2) dustmaids 塵埃 (dust) を擬人化したもの。ニュート

リノを表す 'they' を()では全て「彼ら」と擬人化拙訳した

(3) photons 光子。電磁放射の量子。それ自体が反粒子で、静止質量及び電荷がゼロ、スピンの一である素粒子と考
えられている

(4) Nepal インド北部と中国チベット自治区との間のヒマ
ラヤ山脈中の立憲君主国、首都カトマンズ

全て八音節詩行一九行から成り、AとBの二韻で、
A B A A B B A B A B A B A B A B A B (行頭一字下げた行
はB)と押韻する。韻を踏む行末語を、A、B、それぞ
れ順に挙げておこう。

A — small, all, ball, hall, wall, stall, tall, fall, Nepal, call,

B — mass, pass, glass, gas, brass, class, grass, lass, crass,

得た知識を使った「ニュートリノ」の軽妙な、そして入
念な構成による詩化作品である。作者自身の記述によれば
この詩は一九六〇年一月三日に、前作は同年一月一日
に送稿したもので共に彼の第二詩集『電話柱及びその他の
詩』Telephone Poles and Other Poems (Knopf, 1963) に収

録されている。

*

米国生れで、ミシガン大学卒業後英国に移住して活躍した詩人、アン・ステイヴンソン (Anne Stevenson, 1933-) の感銘深い作品がある。

精神は余りにも鈍い道具なので

The Spirit is Too Blunt an Instrument

精神は余りにも鈍い道具なので

この赤子を創り出すことはとても出来ない。

人間の情熱ほど未熟なものを以ってしたら

その込み入った厳密さを要する特別な委細を

首尾よく為し遂げることはとても出来なかつたであろう、

この小さな巧く操れる幾つもの臍の備わつた闇雲の骨格、

膝と指関節の骨、弾力のある

細かい網目組織の神経節、それに背椎骨は

扱い難い背柱の鎖に繋がれている。

観察してみよう 一本一本はつきり分る睫毛と鋭く弧を描

く指の爪また爪、貝殻そっくりの複雑さを

持つ耳は引き締つた渦巻状で

中心を同じくして縮小されてゆくのだ 精密な

耳小管へと。想像してみよう その

極微の毛細管を、欠点一つなく繋がつた

両方の肺を、眼に見えない神経繊維を

それを通じて完成された身体からだは

既に大脳に答えているのだ。

だから名前を付けよう どのような熱情 いや感情にも、
全く純然たる正確さを備えているのだから。

いや、如何なる欲望とか愛情といえど為し遂げられなかつ

たであろう

練習しても 気質で

完璧に無頓着に行われてきたことは、

身体の気付かないうちの厳密さによるのだから。

心の気紛れのままなのだ 創造するのインヴェント

愛を 絶望を 不安を

そしてそれ故の苦痛もまた。

(三〇九—一〇)

どの連も三連とも、殆ど正確に ABCDCBAE と押韻する九行詩で、詩行の音節数は十音節行（九行）を中心に三音節から一六音節まで自由に展開するものの、一連全体の総音節数は第一連が八六、第二連九三、第三連は八〇でそれ程差がなくまとめられている。

生れた赤子への母親の新鮮な驚異に満ちた感動が、科学精神を詳細に働かせた観察と共に瑞々しく詩に形象化されていて深く読者の心を打つだろう。

*

同じく女性詩人で、マリアン・ムーアの研究者グレイス・シュルマン（Grace Schulman, 1935）の作品がある。

確かに確実性が変化する時

Surely as Certainty Changes

確かに 確実性が変化する時、

潮流が砂を動かす時、

熱が風を送って無理やり海を波立たせる時、

水が上昇して雨となって戻ってきたり

あるいは旋回して煙になり 水蒸気になって降りてくる時、

あなたはうっとりする 自分が変化に参入するのだから
変化は神聖だから。

大地の重さが岩々を圧縮して

木々の下に時間をかける時、あなたは変化に参入する、

私には分るのだ あなたの顔が光を放つのが、私に分って

いるように火が

何もかも全てを変化させて、

上昇しながら落下し、

食物を与え、滋養物で養い、開いて閉ざすのだと。

私は祈りを捧げる プロテウス⁽¹⁾に、あの変化の神と

プロテオライシス⁽²⁾に、「終りの時に変化しながら

変化が終ること」に

古い心象を次々壊してあなたを新しくして下さるようにと
愛はそれ自身が 終ることのない効果なのだから。

(三二一)

訳注

(一) Proteus 姿を変える能力と予言力で名高い海神

(2) proteolysis 生化学での「蛋白質分解」。消化作用などでタンパク質がもっと単純なポリペプチドに分解すること／タンパク質やペプチドが水と反応して消化の際のように更に単純で水溶性の産物になる分解(原著 三二五)

各々七行、六行、五行と行数の**変化**してゆく三連の作品で、特別に押韻はしないことと、各行の音節数も四〜一という自由詩型が、詩の内容とよく調和しているだろう。「蛋白質分解」のような〈変化〉を希う語り手が、「変化は神聖」なのだからと〈変化〉に参入することの重要さを訴えて、読者を静かに魅了する。

*

ピューター・ハウ (Peter Howe, 1943-2009) の次の作品は、これまた一読、心に残り続ける詩ではあるまいか。

人間の上昇 The Ascent of Man

アウストラロピテクス⁽¹⁾

しがみつく、静かに触る。抱き締める 夜通し恐怖を、そして口付ける

くんくん匂いを嗅ぎながら。両親、兄弟たち、一匹狼たち、臭く不潔で

狩りの汚れのまま相手の虱を掴み取る。男たちは唸る、毛むくじゃらで獐猛。嗅覚は巧く働かなくなった。

味のよい漿果なら間に合う。清らかな泉がシューシュー音を立てている

獲物の汚れ取り用に。それでも、猫や人間らしきものがうろつき回る

夜明け時に。死んだ赤子の母親の慟哭が

深淵に満ち 如何なる働き掛けもそれを薄められない。

砕けた石が鋭くなる。というのも殺傷道具一式が

砕くのはそれ程偶然なわけではなく、やり損じて、それから再び

砕くのだ。削ってこすり取る作業は夕べの生産のため。

大変手入れの行き届いた石と石、棍棒の類、この罅穴がこれから先の食物を作るのだ。その状況は苦痛で、

あまり楽ではないが、願うこと、そして思慮のつもりものも、よ、巡って来てくれ、〈私〉に。

ピテカントロプス属⁽²⁾

あまり楽ではないが、願うこと、そして思慮のつもりのも

のよ、巡つて来てくれ、〈私〉に、

私は働くことが必要だ マンモス⁽³⁾の皮革が好きなら

今日のものすごい氷河から走つて滑走して

死滅したのだから。私は熱調理法を試みよう。

石での砕きが私のつましい直喩表現を思い当らせて

火を熾させるのだ というのも二個の燧石を打ち合わせて

火花を飛ばすと、道具が落下するるように 炎が

生じて、あぶり物が出来、私の膝元の子供たちのための夜

の明りとなるのだから。

科学を使用するため 私は 殺されて死んだものの

頭脳の中に渦巻いている資料を食べる。氷が流動する。バ

イソン⁽⁴⁾、アイベックス⁽⁵⁾、

マンモスが群がるのは 私が家庭の歯車を工夫する間。

彼らは草を噛み鼻を鳴らし、平原を楽しんでいる。

私には地上は今や交接^{チャククス}のために限られているので

私は広範囲に渡つて鋭敏に感じるのだ 自分はここに居る

のだと。

私は広範囲に渡つて鋭敏に感じるのだ 自分はここに居る

のだと

犠牲になるために。多雨期⁽⁷⁾に私はやってきた

家族や同僚共々 選び抜いた獲物を追いに

そして選り抜きの巨岩を断ち割りにで、開拓しではなく。

しかし再び寒気が世界を石と化した。冷厳だった

最初のうちそれとしては 私は等分に数え上げた 名指し

しては

あらゆる種を、しかしそれでも非難すべきものは何も知ら

ないまま

私はふらふらと洞窟へ行つて恐怖に戦^{おの}っている友人たちを

抱き締めた。

今や白髪になりずんぐりして、風変りな人となって進路か

らはずれて

私は知るのだ 木々の間から覗いている一層活発な種族が

私の葬儀に出てくれるのだと。私は死に備えて背を伸ばさ

れた。

屈ませられて埋葬された、まるで胎内にいるみたい、私

は振り返る

骨々から 酷い恐怖を凍りつかせてしまふまで

息をこらして意のままに氷の上の氷を踏みつけることで。

ホモ・サピエンス⁽⁹⁾

息をこらして意のままに氷の上の氷を踏みつけることで
豊かな日々が戻ってくる時でさえ、我らは固くなつて

若枝になろうとし、種族を選び出し、現れるのだ

トナカイを狩る人々として。巫女⁽¹⁰⁾は言う。

大仕事を信用して危険な色合いの深い穴へと

降りていって、美しくて巨大な未去勢雄牛が 次々に悔い

ているぞ

我らと関わったことを。草葉⁽¹¹⁾を表すのに水彩ペンは禁止さ

れていて

生き生きと描かれた幻影を創り出すことで食物を調査して

いるのだ。

彫刻された鹿の枝角は投槍器⁽¹²⁾が不滅のものにする、

壮烈な獣たちだ。母親の彫像は皆

我らの繭、繭だ。

暖かさが増してくると大草原は木々を生育させる。トナカ

イの眼は

北を見るし、狩人たちは悲しい報せを歌う

食べ物が間もなく乏しくなる、間もなく乏しくなる時だ。

(三三—一四)

訳注

- (1) Australopithecus 百万年から四百万年前アフリカに住み、脳が小さく、大きな歯を持ち直立二足歩行をした
- (2) Pithecanthropus 十九世紀末ジャワで発見された化石人類ピテカントロプス・エレクトス(—・erectus)「直立猿人・ジャワ原人」など、生存年代は洪積世前期末(約百万〜七十年前)とみられる
- (3) mammoth 更新世(約二百万年前から一万年前まで)に生息したゾウ目(長鼻類)の哺乳動物。シベリアで発見されたこの動物の化石を指して初めて用いられた
- (4) Bison 北米産の牛に似た反芻動物であるアメリカヤギウウ(野牛)及びその近縁種のヨーロッパヤギウウ ibex 野生ヤギの一群(通常、五種)の総称、特にその一種アルプスアイベックスを指す、角が長く後ろへ曲がっている
- (6) Neanderthaler 後期更新世の第一氷期にヨーロッパ及びアジアの西部、中部に生存していた頑強な体格の化石人類、その骨が最初に発見されたドイツのデュッセルドルフ近くの溪谷 Neandertal に因む
- (7) a pluvial age 間氷期の特徴である間欠的な多雨の時期

(8) species 生物の分類の基本単位

(9) Homo Sapiens 現生人類の学名、ヒト属Homoあるいはヒト科Hominidaeの中で唯一の現存種

(10) shaman ある種の部族社会で、神々や霊界との媒介役、病魔退散の祈禱を行なう。五行目以下は、巫女の言葉

(11) spears 草の葉、芽、若枝、幼根。二行後に出てくる「槍」と同綴同音の語彙を使っている

(12) spear-throwers 投げ槍の射程と穿徹力を増すための棒状・板状の道具

十音節詩行を主とする一四行詩四篇が、いずれもABBAABBACDEDEの型で押韻する。各篇の最終行は次の作品の最初の行になっているが、人類の進歩は連続していたことを示す面白い工夫の一つであろう。人類が最初期の状態から次第に進化した様子を想像力を豊かに駆使して描出したもの。「ホモ・サピエンス」の最終行は人類の未来への無気味な予言・警告として響いているようだ。

*

オーデン (Wystan Hugh Auden, 1907-73) の作品を最後に取り上げたい。英国生れで米国に帰化した(一九四六)、もう説明の用のない筈の二十世紀の大詩人である。

予測不可能だが摂理による

Unpredictable but Providential

(ローレン・アイズリーに)⁽¹⁾

春が 突き出す木々の葉と囀る小鳥を伴ってここに再び現れて

私に再び想い起させる 最初の現実の〈行事〉^(イヴェント)を、最初の真物の〈事故〉^(アクシデント)を、あの〈一度〉だけを その時、一たび

その宇宙の

小さな一隅が寛大になってしまい、それに一か八かの機会を与える程になると、或る〈本来の物体〉は

不滅で自給自足できて、唯 闇雲の

衝突経験だけを知っているの、全く ずうずうしくも

怒りっぽい 一つの〈世界〉を要求する一個の〈自己〉になつたのだ、

〈それ自身〉を再生するための〈それ自身〉の外側の〈非自己〉に、

新たな自由を得て成ってゆく、新たな必然性、死へと。

ここから、生命あるものにとって、持続することは変化するという意味になった、

自分自身のためと共に他の全てのために存在しながら
永遠に危険に瀕して。

大きく重々しい氷の竜たちは

ゆっくりとした動きのバレエを演じた、大陸は半分⁽²⁾に裂けて
水の上を酔ったようにぐらぐらした、ゴンドワナ大陸は
がしつと頭からアジアの下腹に激突した。

しかし一大災害も実験を促進しただけだった。

概して、滅亡したのは最適者だった、不適応者は

失敗によって無理やり定住者不在の窪地へと移民させられ
自らの構造を変えて繁栄した。(我ら自身のトガリネズミ

先祖は

〈誰でもない者⁽¹⁾〉だったが、それでも自らを当然だと思っ
ていた、

我らの貴人たちには決して身につけられない落ち着きぶり
だろう。)

遺伝学は

説明できるだろう、形、大きさと姿態を、しかし出来ない

のは、何故体格が

熟慮⁽³⁾について熟慮するように恵まれるべきなのかだ

〈形相⁽⁴⁾〉を〈質料⁽⁴⁾〉から分離しながら、そしてその

〈表象⁽¹⁾〉と

落ち着かない関係で共生するように運命づけられるべきか

なのだ、それも恐れながら

二重の死を、非対称の物体の望み手を、作り手を、

〈自然〉の文法には決して精通しない言語学者を。

〈科学〉は、〈芸術〉同様、楽しみであり、真理との戯れ

だ、だから如何なる遊戯も

消滅させる振りなどすべきではない、重い蓋をされた謎の

〈良い生活⁽⁵⁾〉とは何か？ を。

〈常識〉は勿論私に警告する

どちらも買わないようにと、しかし私が、それらと競争相

手の〈存在の神話〉と較べてみると

権威を纏ったデカルトは厚化粧の奇術師より極端⁽⁶⁾にみえる。

(二八一—八二)

訳注

(1) Loren Eiseley (1907-77) オーデンと親交のあった人類

学者・哲学者・自然科学作家。三六もの名誉学位保持者

(2) Gondwana 約三億年前から約一億年前まで南半球に

あったと考えられる仮説上の大きな大陸、その後分裂・移動して南極、南米、アフリカ、オーストラリアの諸大陸及びアラビア半島、マダガスカル、インド半島、ニュージーニアなどになった（一八七三）。

因に、約五億七千万年前から六千五百万年前まで北半球に存在したとされる仮想の大陸はローラシア大陸（Laurasia）で、後に北米大陸とユーラシア大陸に分離したと考えられている（一九三一）

(3) Form アリストテレス哲学で、ある種類の事物を他のものから区別する本質的な特徴で、現実性に配される。

(4) Matter 形式を具備することで初めて一定のものとなる材料的なもの。可能性に配される。形相と共に存在の根本原理とアリストテレスは考えた。例えば、家の構造は形相、材木は質料

(5) *the Good Life* 一、物質上恵まれた生活・裕福な暮し。

二、道徳（宗教の戒律）に従った、品行方正な生活

(6) 科学と芸術

前半二八行と後半五行から成る、全て一四音節詩行三三三行の作品だが、そのうちの三行は二行でもって一行を構成する仕組なので、その箇処で詩節を形成するとみてよいもの。だから前半三連、後半二連の詩。まず、自然に眼を向

けてから、自然界の創造へ、人事を含めたこの世界全体へと思いを到し、科学と芸術（詩）へ哲学的省察を及ぼす。味読・鑑賞に当って、読者に、感性・知性両面にわたる相当量の〈努力〉を澄して強要する現代の優れた詩の特徴を十分に備えている詩作品である。

*

本稿で取り上げた詩華集の編者たちは、現代の優れた科学者と詩人の言動から、科学と詩とが相互に必要な知識であるのが現代だ、と認識しての作業を結実させたのだ。詩人には科学者らしいところが幾らかあり、科学者には詩人めいたところが幾らかある。この両者にとつての活動の出発点は〈想像力〉である、というのが彼らの誠に正當な結論であった（三七）。

本稿は彼らの集めてくれた作品集から、その主題に典型的かと当筆者の観た、一七人の作者の二三篇を拙訳紹介した。

拙訳での（へ）付と、ゴチック体は、原詩では各々固有名詞以外の大文字で始められる語句と、イタリック体である。